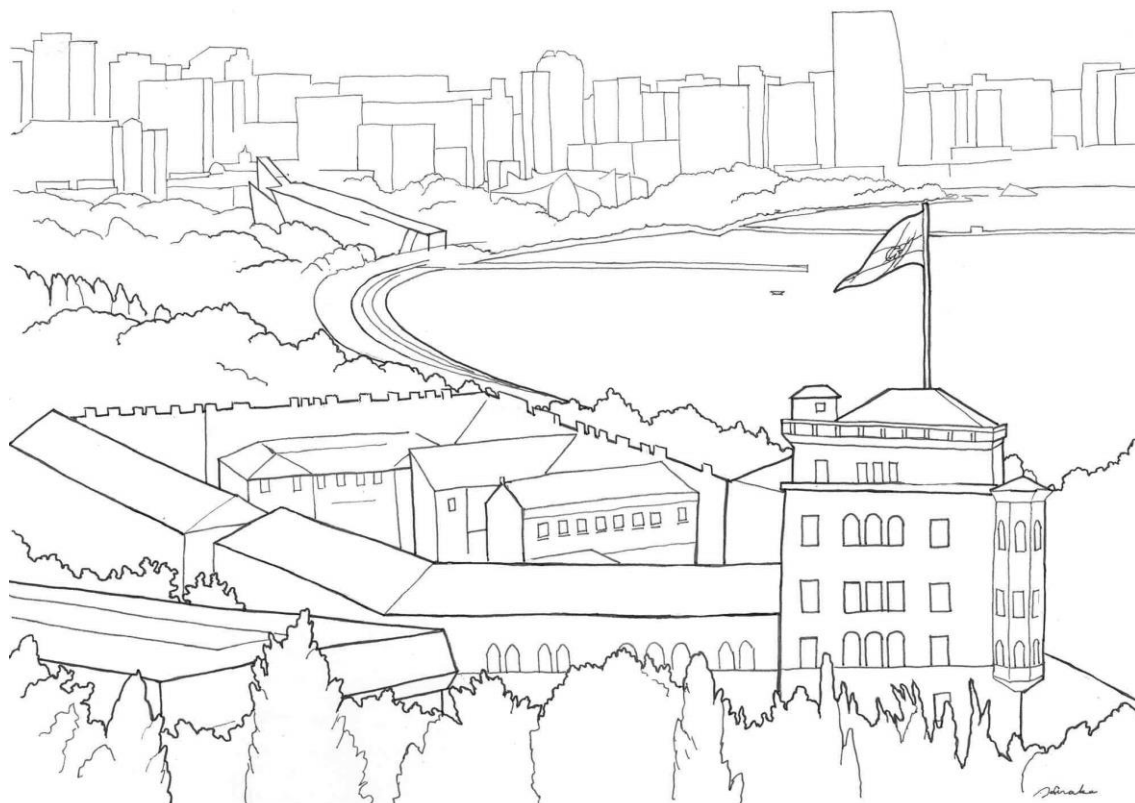


風の町



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

以前、「アゼルバイジャン共和国」という国に3年ほど住んだことがある。ロシアの南、イランの北にあり、首都バクーはカスピ海に面している。バクーではいつも、カスピ海からの風が町中を吹いている。

私がバクーに住み始めたのは、5月だった。「今が一番いい季節ですよ。いいときにいらっしゃいましたね。」と新しい同僚が言った。5月の公園には、この国の人が大好きなバラの花が咲き乱れていた。日暮れには多くの人が公園に集

まって、好きなように時間を過ごしていた。子どもたちがボールを手に遊ぶのをベンチに座りながら見ているお母さん。その隣のベンチには肩を組んで仲良さそうに話しているカップル。ローラースケートの練習をしている若者の姿もあった。

夏になると、色鮮やかな果物や野菜が通りで売られるようになる。田舎から車いっぱいスイカを積み込んで、街角で売っている、立派なひげのおじさん。かごいっぱいのチェリーを、手押し車に乗せて売り歩く、腰の曲がったおばあさん。どれもおいしそうで、よく買った。そして、実際にとってもおいしかった。

夏の夜は長い。雨がほとんど降らないこの町では、外にテーブルと椅子を置いて、人々は夏の夜を楽しむ。飲み物は濃い紅茶。隣には様々な種類のナッツやジャム。友達との会話も弾んで、時間が経つのも忘れてしまうほどだ。

面白いのは、秋が短いことだ。だんだん気温が下がってくるが、昼間はまだ汗が出るほど暖かい日もある。そんな日が続いたかと思うと、ある日突然、冬になる。部屋にはセントラルヒーティングが入る。このシステムはとても快適で、どんなに寒い日でも、部屋の中はTシャツで過ごせるほど暖かくなる。

しかし、外はいつも曇り空だった。雪はそれほど降らなかったし、気温もそれほど低くはならなかったのだが、夏なら気持ちよく感じるカスピ海からの海風も、冬はとても冷たく感じられた。町の人達は、厚いコートに身を包み、それでもよく散歩していた。

この町の人達は散歩が好きだ。私も友人とよく散歩した。地下鉄の駅で待ち合わ

せて、一緒に歩いて町の中心地へ。カフェでお茶を飲んだあと、今度は海岸沿いの公園を歩く。それから、そこで別れてそれぞれの家へ歩いて帰る。

散歩が好きになった私には、いくつかお気に入りの散歩コースがあった。その一つが、丘の上まで上がって、そこからカスピ海を眺めて、またうちに帰ってくるというコースだ。丘の上からは、カスピ海が一望できる。そして、その海から続くバクーの町並みも。

丘の上には、昔の戦争で亡くなった人たちの記念碑が建てられていた。記念碑の前にはたいてい、赤い花が供えられていた。記念碑に描かれている人々の顔は、海の方を静かに見つめていた。戦争ではひどい経験をしたのだろうが、記念碑の中では穏やかな表情で平和な日常を過ごしている人のように見えた。

一説には、バクーは古いペルシア語が語源で、「風の町」を意味する。私は今、日本に戻って横浜という町に住んでいるが、ここも海に面した町だ。海沿いにある山下公園を歩いて、海からの潮風を受けるとき、ふと、あのバクーにいたころを懐かしく思い出す。

(1286 字)

(2021.4 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use

this work, please indicate the source as in the example above.